



江戸糸あやつり人形



70年以上前に寄席で演じられていた芝居です。証誠寺に棲むいたずら好きのタスキが化けて、お坊さんを驚かすお話。ここでは「骨寄せ(こつよせ)」と呼ばれる古くから伝わる仕掛けを使うなど、楽しい芝居になっています。(上演時間約15分)

私たちの糸あやつり人形は、江戸時代に生まれ、江戸—東京を中心に伝えられてきました。「手板(ていた)」という操作板と、二十本前後の糸を遣うことで日本ならではの実に繊細で表情豊かな動きを生みだします。私達はその確かな表現力をもとに、日本のものにこだわりながら今に生きる作品を創り続けています。生命感あふれる人形の息遣いを、より多くの方に感じて頂きたくご案内申し上げます。

かっぱれ

寄席やお座敷で今も踊られています。もとは明治時代に大流行した大道芸です。(上演時間約5分)



黒髪

振付:花柳昌三郎
恋人を待つ女心を映した地唄舞。昔の日本人が見て、聞いて楽しんだものを知ってもらいたく、取り上げました。(上演時間約9分)



酔いどれ

酔いつぶれ寝てしまった酔っぱらい、眼醒めると、お囃子に浮かれて踊りだします。仕掛け「引き抜き」の技をお見せします。(上演時間8分)



獅子舞

日本では縁起物として尊重されています。糸あやつりならではの趣向を凝らしてあります。(上演時間約7分)



「江戸糸あやつり人形」プロフィール

1992年、11代結城孫三郎の元13年間修業した上條充が、独立して設立。日本独自の糸あやつり人形の魅力を広く伝えるため、リスク覚悟で大道芸に出る。また寄席などにも出演。2000年から海外公演、2006年から東京で定期公演を展開。2009年には、文化庁芸術祭に参加。

以上ご紹介の5つの演目と、合間に人形の説明が入って、上演時間は65分を予定しています